授業案	生徒の活動	講師の支援
導入	世界の子どもたちや国際協力に関するクイズに参加し、自分の知っていること・知らなかったことに気づく。	正解・不正解だけで終わらせず、「なぜそうなっているのか」「自分たちの暮らしとどうつながっているのか」を問いかける。 最初から深刻な課題を伝えるのではなく、クイズや身近な問いから始めることで、生徒が安心して参加できる雰囲気をつくる。
展開	グループで社会課題のシナリオを読み、困っている人、伝えたいメッセージ、呼びかけたい行動を整理する。 そのうえで、啓発キャンペーンのアイデアを考え、短く分かりやすく発表する。	各グループを回りながら、生徒の意見を引き出す問いかけを行う。 「誰に伝えたい？」「どんな言葉なら届きそう？」「自分たちの生活と似ているところはある？」など、生徒が自分ごととして考えられるよう支援する。 生徒が受け身で講話を聞くだけでなく、手を動かし、話し合い、発表する参加型の時間にする。 正解を求めるのではなく、多様な視点や表現を認める構成とする。
まとめ	ワークショップを通じて感じたこと、興味を持ったこと、もっと知りたいことをふりかえる。 世界の課題と自分の将来や仕事とのつながりについて考える。	国際協力や社会課題への関わり方は一つではなく、 NPO、行政、企業、教育、医療、福祉、広報、デザイン、メディアなど多様な仕事につながることを伝える。 「まだ夢が決まっていなくても、関心を持つことから未来は広がる」というメッセージで締める。 押しつけのまとめではなく、生徒自身の言葉で学びを整理できる時間にする。 「もっと知りたい」「自分にもできることがありそう」と感じられる終わり方を目指す。